

南アジアにおける表象と身体

日本南アジア学会設立 30 周年記念連続シンポジウム第 3 回は、「南アジアにおける表象と身体」の総合テーマのもと、2018 年 5 月 26 日（土）、東北大学を会場に、同大学大学院国際文化研究科の共催により開催された。内容は以下のとおりである。



（会場となったマルチメディア教育研究棟）

「南アジアにおける表象と身体」

日時 2018年5月26日（土）13:00～17:00

会場 東北大学川内北キャンパス・マルチメディア教育研究棟2階206教室

共催 東北大学大学院国際文化研究科

本シンポジウムの趣旨

南アジアは、豊かな色彩や形象の背後に幾重もの記号やシンボルが横溢し支配する世界である。至高神、高邁な哲理、自内証、人間心理、個や集団の帰属なども、好んで何らかの具象的・外面的・身体的な標識によって比喩的意味が負託され、代行的に表現されて他者に伝えられる。古典舞踊のアビナヤやムドラー、仏教・ジャイナ・ヒンドゥー教の神人同形観と像造表現、身分や帰属を示す着衣や身体装飾などが典型である。

ヨーガの思想と実践にみられるように、個別具体的な身体や感性を経由して＜聖なるもの＞をはじめとする「形のないもの」に接近するという方向性や、逆に、具象とは親和性の薄い、観念、心象、神、超越者が、具体的・個別的な行為、肉体、象徴物を借りて表示

され、あるいは、現世の身体等に来臨し、憑依などを通じて示現することで、経験対象として現実世界に転位する。南アジアの文化は、このように、「形のないもの」と「形のあるもの」、「聖なるもの」と「俗なるもの」、「抽象的なもの」と「具象的なもの」、「精神的なもの」と「身体的なもの」といった二項間の、表象や身体を介在させた交錯・往還という現象と関係性のなかに、その一特徴を見てとることができる。

本シンポジウムでは、以上の認識を踏まえ、南アジアの諸般の文化現象の底流にある表象と身体をめぐる諸問題に、通時的・共時的双方の観点から、かつグローバルな切り口をも交えて光を当てる。

(山下 博司)

司会進行 山下博司（東北大学大学院教授）、馬内里美（東北文化学園大学准教授）

プログラム

開会の辞と趣旨説明 山下博司



第Ⅰ部「＜ヨーガ＞から＜YOGA＞へ ― ヨガの歩みと現在 ―」（司会 山下博司）

遠藤 康（愛知文教大学教授）

「古典ヨーガとハタ・ヨーガ ― 身体観の相違と歴史背景 ―」

平野久仁子（上智大学アジア文化研究所客員所員／パドマ・ヨーガ・アシュラム代表）

「近現代のヨーガの諸相をめぐる ―＜ヨーガ＞からホリスティック・アプローチとしてのYOGAへ―」

第Ⅱ部「聖と俗をめぐる音と光 ― 舞踊・音楽・メディア ―」（司会 馬内里美）

レクチャー・デモンストレーション

「聖と俗のはざまで＜愛＞を歌い踊る ― クリシュナ神をめぐる断章 ―」

井上貴子（大東文化大学教授）[歌・ナトゥヴァンガム]

野火杏子（コンテンポラリーナティヤムカンパニー主宰）[バラタナーティヤム]

荒井俊也 [ムリダンガム]

竹村嘉晃（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター・推進センター研究員／
南アジア地域研究プロジェクト国立民族学博物館拠点・特任助教）
「神霊イメージの濫用——ケーララの神霊信仰と左翼・メディア・ポピュラーカルチャー——」

岡光信子（東北大学講師／中央大学・東北学院大学客員研究員）
「インド映画のコンテンツとマーケットの変容——ヒンディー映画の話題作を中心に——」

第Ⅲ部 パネル討論 — フロアもまじえて — （司会 山下博司）

閉会の辞 山下博司

以下、各報告者執筆による発表要旨を記す。

第Ⅰ部 「＜ヨーガ＞から＜YOGA＞へ — ヨガの歩みと現在 — 」

1. 遠藤 康

「古典ヨーガとハタ・ヨーガー身体観の相違と歴史背景—」

本発表では、ハタ・ヨーガと古典ヨーガの身体観の特徴と相違、その歴史的背景を考察した。

ハタ・ヨーガは、輪のようなエネルギー中枢や、エネルギー流路の脈管を持つ微細な身体があるとする。その基底部に眠る女神・生命エネルギーをヨーガ実践により覚醒上昇させ、身体上部に存する男神と合一させ、人間本来の状態を回復する。微細身の諸要素は宇宙構成要素と対応し、身体は小宇宙として理解される。

一方、『ヨーガ・スートラ』と『ヨーガ・バーシュヤ』による古典ヨーガ思想は、心理的肉体的要素を離れた純粹精神が人間の本質であると考え。ヨーガは、心を抑制して人間の本質を認識回復し、純粹精神を解放する実践であるため、身体に積極的価値は置かれない。古典ヨーガは、サーンキヤ哲学を枠組みとし、種々のヨーガ伝承を選択結合して造られた。人間の本質（純粹精神）を認識回復する実践として他学派でも学ばれたため、ヨーガの一典型になったと思われるが、先行諸ヨーガを網羅したものではない。古典ヨーガが成立した6世紀頃に、ハタ・ヨーガ的实践法があったことは証明も否定もできない。

ハタ・ヨーガ的な身体観は、四輪と主要三脈管によるものとして、ヒンドゥー文献よりも先に仏教後期密教文献に見られる。行者は現象世界と自己を外的マンダラとその主尊として観想し、また内的なマンダラとして、体内の脈管等を尊格や聖地として観想するという。ヒンドゥー教タントリズムの文献にも、六輪三脈等の身体観が見ら

れる。シュリーヴィディヤー派の文献では、修行者は火・太陽・月という三つの祭火を外的マンダラにおいて観想し、また体内の三輪としても観想するという。

タントリズムでは、修行者と宇宙を聖化する外的儀礼での観想が、小宇宙である修行者内部の観想へと変換された。ハタ・ヨーガは、内的儀礼としての瞑想から発展したヨーガと考えられよう。儀礼・祭祀の内部化は、既にブラーフマナに見られた思考法である。この意味で、ハタ・ヨーガも古代からのインド宗教伝統の中で形成されたということができる。



2. 平野 久仁子

「近現代のヨーガの諸相をめぐって—<ヨーガ>からホリスティック・アプローチとしての YOGA へ—」

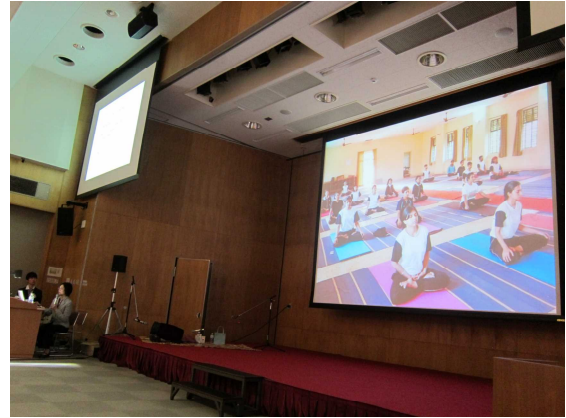
近年、インドの古代から宗教的実践法として伝承されてきたヨーガが世界的に普及している。それに貢献した人物として、19世紀末から20世紀後半にかけては、スワミー・ヴィヴェーカーナンダ（1863-1902）、スワミー・クヴァラヤーナンダ（1883-1966）、スワミー・シヴァーナンダ（1887-1963）、ティルマライ・クリシュナマーチャーリヤ（1888-1989）らが挙げられよう。

ヴィヴェーカーナンダは『ヨーガ・スートラ』に立脚したラージャ（王道）ヨーガをはじめ、カルマ（行為）、ジュニャーナ（智慧）、バクティ（信愛）の各ヨーガを唱え、欧米へのヨーガ伝道の嚆矢としても捉えられている。一方でクヴァラヤーナンダは身体的技法を主とするハタ・ヨーガの科学研究を開始し、教育や療法としての応用を試みた。またシヴァーナンダはハタ・ヨーガを含めた統合的なヨーガ行を提唱し、さらにクリシュナマーチャーリヤは連続したアーサナ（坐法、ポーズ）のスタイルを構築した。こうした様々なヨーガの普及においては伝道力だけではなく出版物等の影響も大きいと考えられる。

次に、クヴァラヤーナンダが1924年にインド・ロナーヴラーに設立したカイヴァリヤダーマ・ヨーガ研究所付属ヨーガ・カレッジにおけるヨーガ教育や、ヘルスケア・センターでのヨーガ実践の様子的一端を紹介した。その学生や滞在者数は増加傾向にあるが、背景として、人々の健康志向の高まりや、国連での「国際ヨーガの日（International Day of Yoga）」の制定（2014年）、さらにはユネスコ無形文化遺産への登録（2016年）等に見られるように、インド政府レベルでのいわば文化的戦略としてヨーガを推進するといった状況もある。

う。

このようにヨーガは近現代において広く伝道され、研究が進められてきたが、政府主導の中、今後どのように反映されていくのか検討の余地等あろうが、心身の健康や幸福のためのホリスティックな実践法としてのYOGAへと変容してきていることは確かだろうと思う。



第II部「聖と俗をめぐる音と光 ― 舞踊・音楽・メディア ―」

3. 井上 貴子、野火 杏子、荒井 俊也

「聖と俗のはざまで＜愛＞を歌い踊る―クリシュナ神をめぐる断章―」

神々の姿や行為は人間の身体を通じてどのように表現されてきたか、南インド古典舞踊バラタナーティヤムの実演を交えて解説した。20世紀以降、バラタの『ナーティヤ・シャーストラ』に由来する名称で呼ばれるようになった舞踊は、ますます「古典」へと回帰していったと思われる。舞踊の身体技法を大別すると、身体の動きをみせるヌリッタと意味表現を重視するアビナヤの二種類があるが、本発表では後者に焦点をあてた。『ナーティヤ・シャーストラ』によればアビナヤとはラサを実現するための演者の技法を表し、身体、言葉、衣装や化粧、感情表現の四種に大別される。舞踊家にとって最も重要な文献とされる『アビナヤ・ダルパナ』は、四種のアビナヤをシヴァ神の体現として観想するシュローカから始まる。今日、このシュローカ自体に振り付けがされ、実際に踊られている。また、手の形や足の動き、ポーズなどによってどのような意味を表すか、身体によるアビナヤの多彩な技法が具体的に解説されている。

12世紀の詩人ジャヤデーヴァの抒情詩『ギータ・ゴーヴィンダ』は、ヴィシュヌ神の化身で牛飼いの姿のクリシュナ神と恋人のラーダーが繰り広げる恋愛模様を描き、インド古典舞踊の主要な演目として定着している。本発表では、ヴィシュヌ＝クリシュナの十化身を描き出す第1曲目の「ダシャーヴァターラ」と、クリシュナの浮気現場を目撃したラーダーがいかに嫉妬に苦しみ嘆き悲しんでいるかを、女友達がクリシュナに告げる場面である第8曲目を上演した。第1曲目は神の聖なる行いに焦点をあてた内容だが、第8曲目はラーダーの揺れ動く女心が詳細に描かれる。このように、神に対する信者(人)のバクティを男女の恋愛になぞらえて表現するマドゥラ・バクティをテーマとする作品はその後も次々と

作られ、古典舞踊の表現世界をより豊かに広げていった。



4. 竹村 嘉晃

「神霊イメージの濫用ーケーララの神霊信仰と左翼・メディア・ポピュラーカルチャーー」

南インド・ケーララ州北部のローカルなヒンドゥー社会では、乾季にあたる10月初旬から6月中旬にかけて、テイヤムと呼ばれる神霊を祀った祭儀がカースト寺院や祠などで盛んに行われている。祭儀の場で旧不可触民階層の男性の身体に降臨するテイヤム神には、イギリス植民地時代から今日に至るまで、様々なイメージが付与されてきた。また神霊の表象に着目するならば、現代ケーララ社会においてはそのイメージが祭儀空間に限定されず、人びとの生活世界における様々な位相と接合しながら受容・消費されている。1990年代以降のインド経済の著しい発展による恩恵や湾岸アラブ諸国に渡ったケーララ出身の出

稼ぎ移民がもたらすグローバルな資本の流入、さらにはニュー・メディアの発展と影響は、テイヤム祭儀をとりまく環境に大きな変化をもたらし、テイヤム神の表象は多元的かつ複数の場に多様な形で現れている。

本発表では、歴史的視点をふまえながら、ローカルな神霊が本来の文脈から逸脱して表象されている現代的な事象を複数の文脈から考察した。とくに、共産党勢力の流用と思惑、映画・演劇界での他者による表象と価値づけ、ポピュラー・カルチャーとしてデフォルメされた商品化の動向やニュー・メディアによる影響などについて個々の事例から検討し、テイヤムの表象をめぐるアリーナがダイナミックな文化生産の磁場として機能し、たえず生成や変転をくりかえしていることを明らかにした。そして、村落レベルにおける個々の文化的実践さえグローバルな価値の表象を含有している現代社会において、旧不可触民階層の身体を介して祭儀の場に顕現するテイヤム神は、多様なメディアと接合することで複写・複製可能な身体外的媒体へと変容・氾濫し、そのイメージは場所性に依存することなく、グローバルな文脈において繰り返し表象・消費されていることを指摘した。



5. 岡光 信子

「インド映画のコンテンツとマーケットの変容ーヒンディー映画の話題作を中心にー」

インドの娯楽映画に対する旧来のイメージは、総じて、破天荒なストーリーラインに沿った、歌って踊るドリームシーンが満載された映画というステレオタイプのなものであった。このことは、インド映画そのものが民衆の厳しい日常生活から逃避するための手段（エスケープスト・メディア）として発達してきた歴史と無縁ではない。本発表では、ヒンディー映画を取り上げ、近年の話題作を中心にコンテンツとマーケットにおける変容を分析し、そこに従来のもとは異なるトレンドが観察されることとその背景について、ヒンディー映画の世界的需要の高まりにも着目しつつ明らかにした。

ヒンディー映画に焦点を合わせる理由は、①特定の地域に配給が限定される映画とは対照的に全インド的な市場を有すること、②インドで検閲を通過し上映を許可された作品群のうち言語別の本数において他を凌駕していること、③海外に輸出される本数も最多で、市場が顕著にグローバル化していること、の3点に集約できる。ヒンディー映画はインド映画の世界進出を象徴・代表するものであり、かつインド映画界の将来的な動向を見極める上で格好の材料なのである。

ヒンディー映画は、インド国内での圧倒的な優位性を確保しつつ、海外の既存の輸出市

場を越えた旺盛な進出・浸透を見せているが、市場の拡大・変化につれ、そこで求められるものを取り込むかたちでのコンテンツの変容が顕在化している。インドの文化的コードや知識を共有しないオーディエンスにも受け入れられる要素を含有したものに変容を遂げつつあり、それがステレオタイプ化した既成イメージに変更を迫る作品群の登場というかたちに結実しているのである。興行収入の作品別順位などはこの事情を如実に反映している。

映画は、音と光が織りなす「芸術作品」でありながら、市場における需要と供給のバランスの上に成立する「商業製品」でもある。ヒンディー映画は、市場の拡大とオーディエンスの多様化という現実を前に、従来にも増して不特定多数により受容・消費されることを前提に、インド映画としての形式とアイデンティティに調整を施しつつ企画・制作されるようになっていく。ここにインド映画のダイナミズムの一端を認めることができる。



聴衆からの反響と仙台シンポジウムの意義

シンポジウム当日は快晴に恵まれ、南アジア学会員を含む学生・市民が参集した。都合100人近い人々が一堂に会し、地方の一都市でのこの種の行事にしては健闘したほうと言えよう。進行上の制約に加え運営の不手際も手伝って、結果的にじゅうぶんな時間枠を確保し得なかったが、フロアーをまじえたコメントや質疑が交わされた。

第Ⅰ部においては、ラージャヨーガとハタヨーガの区分や史的展開に関して、文献研究の証拠に基づくきめ細かい議論の必要性が痛感できた旨のコメント（遠藤報告）、ヨーガの担い手に関わるジェンダーの問題、瞑想的ヨーガの展開についての質問、ヨーガの医療面での効用についての発問など（平野報告）が寄せられた。

来場者からのアンケートには、ヨーガの実践者から、現代に至るヨーガの歩みを時系列的に辿れたことは有意義だったとする感想があった。「文化現象としてのヨーガ」に関わり、西洋文化やキリスト教の影響を問う質問も見られた。遠藤氏の発表内容については、汎インドの宗教実践であるヨーガがムスリムやシク教徒にどのように受け入れられているか、微細身（スークシュマ・シャリーラ）とは物質か否かなど、専門的な質問も記されていた。平野氏には、カイヴァリヤダーマ・ヨーガ研究所は日本の大学に匹敵する組織なのか否か、ラフターヨーガの位置づけ、ヴィヴェーカーナンダがヨーガを「ユニオン」と称したが具体的にはどういうことか、パッタビ・ジョイスが各アーサナの効用を説いたが

そもそもセラピー的要素を採り入れたのは誰か、などの質問が見出された。また、厚労省のホームページにヨーガの効用を説く論文が多く掲げられている旨の新情報が寄せられたり、ヨーガの実践セッションがあれば参加したかったとの感想を記したものも見られた。

第Ⅱ部のレクチャー・デモンストレーション（井上・野火・荒井）に関しては、古典音楽・声楽における「楽譜」の問題や踊り手が着用する衣装の件などにつき問答がなされた。それに続くセッションでは、テイヤム神が「ゆるキャラ」として確立する可能性、同神が宗教的文脈外で現れる際の分界線（デザイン、神霊の種類、表象の仕方で許容される／許容されない範囲や規準）、映画に登場するテイヤムと祭儀におけるものとの異同についての質問（竹村報告）、インド映画におけるドリームシーンの頻出と言語的多様性との関連の有無についての質問（岡光報告）が寄せられた。

翻ってアンケート票を見ると、井上氏らのプレゼンについては、インド社会における感情表現の横溢と理性の問題（感情を表出させることと理性的であることとに対する社会の考え方）、舞踊家の着用していた衣装の名称、破壊の神シヴァが舞踊の神であることへの疑問、誰が現代のバラタナーティヤムを担い（あるいは踊り）その目的は何か、などについての質問が寄せられていた。竹村氏の報告については、西洋の文化や宗教がテイヤム信仰に与えた影響といった包括的な疑問に加え、テイヤムを観る者の心理、テイヤム神の利益、さらには湾岸諸国がインド人の祭りに資金提供する理由など、重要と思われる質問も相次いで披瀝されていた。ほんらい差別されて然るべきテイヤムの担い手であっても、注目を浴びることで他カーストが参入してくることはあるかなど、本質の一端を突く質問も見られた。岡光氏の発表内容については、インド映画事情の解説は興味深かったという感想、「マサラ映画」との呼称は日本独自のものか否かとの問い、制作費の海外調達の有無の問題、ボリウッド全盛の中で他言語の映画の制作本数減少の有無を問う質問があった。長年ヒーローを張っているシャールク・カーンのような大俳優が健在のうちは若いイケメン俳優がのし上がる隙はないのかとか、『Doom3』のファンなので言及されて嬉しかったなど、インド映画オタクならではの質問も散見した。「映画」が南アジア研究の一ジャンルとして確立することを望むとの願いを綴ったものもあった。

第Ⅰ部、第Ⅱ部を通して、何れの質疑応答も人々の興味や疑問を反映する刺激に富むものであり、発表内容への旺盛な関心と発問への真摯な返答が印象に残った。アンケート票に記された質問内容や感想にしても然りで、発言者の蘊蓄のほどすら窺えるものもあった。来集者の間で意義のある行事と捉えられていたことの証しであり、総じて好評であった。質問票に記された一々の事項に答える暇が事実上作り得なかったことに悔いは残るが、このたびの全国 6 箇所の連続シンポジウム企画が共通に目指すところでもある、晦渋な業界用語を廃し、分野横断的な議論の場の形成という課題には応え得たのではないか。学会主催の行事だけあってややお堅い感じがしたとの感想があったことも事実だが、とりあえずの目標は達成し得たものと信じたい。

なお、日本南アジア学会と本行事の紹介・宣伝を兼ねて企画・運営委員代表の山下博司が東北大学外国人留学生有志が編集・発行する英語 Web マガジン *Sentinel* のインタビュー取材に応じた（<https://sentineljapan.com/2018/05/21/one-professors-rediscovery-of-india2/>）。また当日は、東北大学学友会報道部が行事全体をカバーして、『東北大学新聞』2018 年 6

月号（同年 6 月 26 日発行）で詳しく紹介され、事後にはなったが不特定多数の学生たちの知るところとなったのは幸いであった（<http://ton-press.blogspot.com/>）。

課題と展望

意義深かったと同時に課題が見え隠れした催しでもあった。汲み得た教訓も含めここに一端を披瀝しておきたい。

先に指摘したように、学会員数が圧倒的に少ない地方都市での開催の場合、所属校の学内行事と重なったりなど、事前準備や行事の運営に実動できる者が局限され、当日を担う者に多大な負担が集中する結果となる。しかも今回のように、司会者 3 名の一角に前日遅くの突如のキャンセルが生じたりすると、マンパワーに破綻が生じ、進行や運営そのものに重大な支障をきたしてしまう。企画・運営委員だからといって登壇者・演技者を司会に駆り出すわけにもいかない。やむを得ず筆者（山下）が急遽第Ⅲ部の司会役に回ったが、原状復帰を依頼した清掃業者からの電話がポケットで鳴り響いて来場者に見苦しいさまを見せてしまったりなど、反省されることしきりである。

今回のように、学会員が寡少でかつ他地域から孤立して立地する地方都市での開催の場合、いきおい遠方から発表者を集めざるを得ず、学会からの支給はあるにせよ移動や滞在に赤字覚悟の出動を個々人に願い出ることになって、心苦しい思いにかられた。ましてや、正規の学術大会でもないため、全国から学会員の来臨を期待するには仙台はあまりにも遠い。当然ながら不特定多数の学生や市民に来場を呼びかけざるを得ないが、これまた会場が市中心部から離れるため、あの手この手の広報手段を講じに場所場所を奔走することになった。山下の本務校および所属部局の公式 H P、同大学留学生主宰の英語交流サイト（*Sentinel*）、市内・県内の各種イベント情報サイト、学内に加え公共施設や地下鉄駅への掲示、一般紙のミニ情報欄、（他県・他地域にもわたる）知人たちへの声がけ、教室でのチラシ配布など、考え得るかぎりの努力を傾けたが、それが来場者数に反映されたかといえれば心許ないものがある。

基本には「南アジア」なる概念の定着の弱さがある。筆者も兼ねてから講演をしたり映画上映会を開いたりなどしてインド世界的话题を提供し、それなりに努力を傾けてきたつもりだが、なにせ一地方都市における「南アジア」の理解度・浸透度はきわめて低く、照会してきた人の中には明らかに「東南アジア」と混同している例すら見受けられた。今回の企画は、知名度の著しく劣る南アジア地域、南アジア研究、南アジア学会への一般の関心を発掘するのに僅かながらでも貢献し得たのではないかと思う。一般への認知度の喚起のために、学会全体がより一層の発信努力をすべきことが痛感された企画でもあった。

上述の諸問題にもかかわらず、感慨と意義の深い試みであったことは間違いない。行事自体は大過なく切り抜けることができ、胸をなで下ろしている。ご迷惑を厭わずご多忙ななか惜しみないご協力を賜った報告者・演技者の皆さま、ご来場の学生・市民の皆さま、東北大学理学部と国際文化研究科からなる学生諸君、磯田熙文東北大学名誉教授をはじめとする企画・運営委員の皆さまに謝意を表したい。

（文責 山下博司）